RCC スクール

# 「＃湯﨑知事と語ってみた」2023

とき 令和５年１１月２５日（土）

ところ グランドプリンスホテル広島

## 目次頁


開会 ..... 2
自己紹介 ..... 2
ひろしまビジョン説明 ..... 2
意見交換①（加計高校芸北分校・安芸府中高校・御調高校・広大附属高校） ..... 4
意見交換②（話題提供） ..... 6
閉会 ..... 17

開会

司　　会：　RCC スクール「＃湯﨑知事と語ってみた」supported by　田宮パーツということで開会していきたいと思います。皆さん、よろしくお願いします。
　この企画なんですけれど、広島県の高校生と湯﨑知事に語り合う場を持ってもらって、広く、また配信で見てもらって、広島の未来を考えるきっかけにしようというものです。司会は RCC アナウンサーの坂上俊次です。よろしくお願いします。

自己紹介

司　　会：　自己紹介を順番にお願いします。
林　　谷：　加計高校芸北分校 1 年の林谷茜です。お願いします。
橋　　本：　加計高校芸北分校の橋本亜斗夢です。よろしくお願いします。
青　　木：　安芸府中高校国際科 3 年生の青木真耶です。本日はよろしくお願いします。
三　　井：　同じく安芸府中高校国際科 2 年生の三井結葉です。よろしくお願いします。
宮　　地：　御調高校 2 年生の宮地香弥です。よろしくお願いします。
延　　安：　同じく御調高校 2 年の延安奏明です。よろしくお願いします。
谷　　村：　広島大学附属高等学校 1 年の谷村咲蕾です。よろしくお願いします。
司　　会：　円卓だけにぐるっと回ってきたので、せっかくなのでお願いしてもよろしいですか。
湯 﨑 知 事：　広島県知事の湯﨑英彦です。よろしくお願いします。
司　　会：　湯﨑知事、今日はこれ、サミットの会場ということなんです。改めてこの円卓の雰囲気はどうですか。
湯 﨑 知 事：　僕も初めて座ったんですけど、いい感じです。初めてじゃないか。すみません。初めてではないですけど、こんなにみんなと一緒に座ったのは初めてで。いい感じですね。
司　　会：　円卓って話しやすいですね。
湯 﨑 知 事：　そうですね。みんなが、自分が中心ですから。全員が。
司　　会：　谷村さん、どうですか。こういう場というのは、緊張感は。
谷　　村：　緊張します。しかもサミットという、本当に雰囲気が神妙な感じで。すごく緊張します。
司　　会：　ここから若い人の力で大きな 1 歩を踏み出していきたいと思いますので、よろしくお願いします。なお、この模様は RCC IRAW でライブ配信、並びにアーカイブに残りますので、よかったら帰って見てくださいね。宮地くん、見てくださいね。
宮　　地：　見ます。
司　　会：　お願いします。
　さて、この企画なんですが、こうやって湯﨑知事と語ってもらい、広く関係者にも見てもらって、高校生にも見てもらって、広島の未来を考えるきっかけにしていこうという時間にしていきたいと思います。
　では、まず湯﨑知事、「ひろしまビジョン」の概要を含めてご挨拶とともにご紹介をお願いします。

ひろしまビジョン

湯 﨑 知 事：　改めまして、広島県の湯﨑です。今スクリーンにも映っていますけれども、ひろしまビジョンというのをご紹介したいと思います。
　今日、この会では、今年開催された G7 広島サミットの取組、そこで感じたこと、あるいは未来の広島県を担う高校生の皆さんが夢中になっていること、興味のあること、悩んでいることについて、いろいろお話しできたらなと思います。
　その前に、このひろしまビジョンですけれども、ビジョンを 2021 年に 10 年後の目指す姿と、その実現に向けた取組についてまとめたものになっています。2030 年といえば、今日参加の皆さんは大体 20 代半ばになって、社会人になっているんじゃないかと思います。結婚している人もいるかもしれない、人生の大きな分岐点を迎えているんじゃないかなと思います。これからの皆さんの将来と広島県の目指す姿を少し重ねてみて、こんなことに共感できるなとか、もっとこうだったらいいなということがあれば、意見交換ができればと思います。
　まず、このビジョンですけれども、最初に 30 年後の「あるべき姿」として「先行き不

透明な時代においても、夢と希望を持ち、安心して健康に生きがいを持って暮らすことができる」「それぞれの価値観に基づいた満足を実現できる社会」をつくっていきたいとありますが、その30年後から逆算して、基本理念と目指す姿を定めています。

まずは基本理念、県民の皆さまの普遍的な願いだと思いますが、「将来にわたって、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県の実現」というのが基本理念となっています。そして目指す姿というのは、「県民一人一人が安心の土台と誇りによって、夢や希望に挑戦し、仕事も暮らしも里もまちも、それぞれの欲張りなライフスタイルの実現」となっています。

目指す姿の実現に向けた基本的な考え方というのは、イノベーションを起こしてしっかりとした経済基盤をつくっていくということや、何かあったときのセーフティネットと呼ばれるものを構築することで、将来に対する不安を軽減して安心につなげていくというのが、まずベースとしてあります。その上で、広島県には豊かな自然やものづくり産業の技術とか様々な強みがあります。目の前の瀬戸内の景色もそうですけれども、これを磨くことで誇りを高めていきます。安心の土台と誇りを高めることによって、県民の皆さまが夢や希望を諦めることなく挑戦していく、ということが新しいビジョンの目指す姿となっています。

さらに、こうした挑戦へのさらなる1歩というのは、県民の皆さまの働きがいや生きがいとなって、それぞれの地域での活力を生み、広島県全体の発展や活性化につながっていくと考えています。

安心・誇り・挑戦の実現に向けて様々な取組をしているのですが、いろいろな施策を貫くような形で3つの視点を持って取り組んでいます。

まずはDX、デジタルトランスフォーメーションですね。今、デジタル化がすごく進んでいますけれども、これによって今、大きく我々の生活も社会も変わろうとしています。特に、AIは大きな変化を生もうとしています。

それから、もう1つは広島ブランドの強化というもので、「ブランドって何？」というのもありますけれども、人々が思い浮かべるイメージですね。広島ってこういうところだというのを皆が共通して思い浮かべるような、それが我々はもちろんですけれども、県外の人や世界の人にもそれを思い浮かべてもらえる。そういうものがあると非常に強くなるので、「ひろしまブランドの強化」というのを進めていきます。

そして最後に、人材育成ですね。これから非常に変化が激しくなっていく不透明な時代ですけれども、自ら考えて解決策をつくっていく力が求められていきます。あるいは、産業にしても、社会にしても、いろいろなところで人の力が一番大事なので、人を育てていくということが、いろいろな分野で非常に大きなテーマになっていきます。

17の分野が施策としてはあるのですが、こういった分野で施策をつくって実施して、今の3つの視点を全ての分野を貫いて取り組んでいるということです。具体的な施策の中身は、今日は申し上げませんけれども、全体のおおまかな考え方というのはこういうことで、ビジョンがつくられています。また、将来を考えたときに、このビジョンを思い出してもらって、あるいは今日お配りしている、個別の施策を見てもらったりして、何かの参考にしてもらえるとうれしく思います。以上です。

司　　会：　ありがとうございました。代表して、安芸府中の青木さんは、広島にすごく愛着があってこだわりも強いですけれど、今の話を聞いて、どんなふうに感じましたか。

青　　木：　先ほども会話をしていたときにあったんですけれど、やはり広島の若者は広島の大学を卒業して出ていくことが多いと思うんですけれど、人それぞれが広島に魅力を感じて、この広島の街に誇りを持って一緒につくり上げていけるような未来になればいいなと思いました。

司　　会：　これは、実は前回まで「＃湯﨑知事と語ってみた」の統一テーマにしていたんですけれど、卒業後、広島に残りたいという方、手を挙げてください。
割と多いですね。青木さんは大学も含めて広島にずっといたい。

青　　木：　はい。9日後に大学入試の2次試験を控えていて、今はその準備中という段階なんですけど、今日のお話も含めてヒントになればいいなと思っています。

司　　会：　9日後って、広島県内のどこを受けるとか。

青　　木：　叡啓大学を受けます。

司　　会：　そうなんですね。早いんですね。全国で選べる中で、どうして叡啓と思ったんですか。

青　　木：　広島に自分は引っ越してきた身なんですけど、大学までは広島にいたいなという思い

もあって、広島県内の国公立の大学を選びました。また、自分は得意なことが英語なので、英語を使った仕事に就きたいと思って、叡啓大学を選択しました。

司　　会：　知事、我々の世代でいうと、キャリアの高校まで広島で過ごして、大学で東京とか関西とか。

ここに歯止めをかけたいという地元の思いもあると思うんですけれども、どんなふうに感じていますか。

湯 﨑 知 事：　そこは正直言うと、出ていってもいいのかなと思っているんですよね。ずっと広島にいるのももちろんいいし、出ていろいろな世界を知ってもらうのもいいし。そこで今問題なのは、入りと出のバランスが崩れているというところで、特に就職してからのところが、どうしても減ってしまっているので、そのときに広島から出て行く子もいるけれど、広島に来る若い人もいて、そこでバランスが取れるというのが一番望ましい姿かなと思います。

G7 サミット

司　　会：　いかに広島が発信して、広島の魅力を高めていくとかいうことですけれど、テーマ 1、「G7 広島サミット」を経て感じたことを、皆さんに今日フリップに書いていただきました。

まず、一斉に上げてもらいたいと思います。一斉にお願いします。せーの、どん。

伝統芸能、伝統芸能、平和、少女の願い、広島から世界へ、経済効果、小さな 1 歩。まずは、加計芸北の林谷さんから。どんなふうに感じたのですか。

林　　谷：　今回の G7 サミットで、私たちの芸北分校の神楽部は、海外のメディアの方々に向けて、広島の伝統芸能である神楽を上演させていただきました。私たちは後ろに置いてある大蛇を使った演目「ヤマタノオロチ」をやらせてもらったんですけれど、私たちはメディアセンターで、大蛇などの神楽の衣装を着けたりする体験会をやったときに、海外のたくさんの方が興味を持ってくださって、外国の方から見ても日本の伝統芸能である神楽は魅力的に映っている、神楽は国内外を問わず、たくさんの人から興味を持ってもらえる素晴らしいものなんだなと思って、伝統芸能のすごさを感じました。

司　　会：　そういったところでは橋本さんも同じような文脈でしょうか。教えてもらえますか。

橋　　本：　僕も林谷さんと同じで、神楽について発信できたことがよかったなと思っています。神楽は、広島県、島根県もですけれど、西日本で活動していて国内にもめちゃ広がっているというわけではないんですけれど、それを海外に発信できたことは大きな 1 歩だったのかなと思うので、よかったなと思っています。

司　　会：　これでいうと、湯﨑知事いかがですか。サミットって首脳が話し合う場であり、同時に開催国、開催地域のメッセージとかカルチャーを届けることができる場なんですね。

湯 﨑 知 事：　そうですね。我々もホストとして 2 つのことを目指していたのですけれども、1 つは平和のメッセージの発信ということ、これは国からの発信とか G7 からの発信もありますけれども、我々自身、広島として発信していくということ。それからもう 1 つは、広島の魅力を発信していくということですね。そういう意味では、メディアセンターはすごく大きな役割を果たしていましたし、我々もプレスツアーを行って、世界のメディアの皆さんに県のいろいろなところを回ってもらって、広島の良さを実感していただきました。

そういう中で、高校生の皆さん、あるいは地域の皆さんが、神楽を舞っていただいたり、食べ物を提供していただいたりして、広島の魅力をとてもたくさん伝えてもらえたかなと思います。

司　　会：　これは経済効果のみならずだと思うんですけれど、その後の反響についても耳に入ってきたりしますか。

湯 﨑 知 事：　それは、まず報道ですよね。サミットで、結果、いろいろな報道がありました。もちろん、サミットそのものもあって、なかなか区別するのが難しいですけれど、全体で 8,000 億円分くらいの報道がなされているんですよね。その中で、もちろん広島の魅力や平和のこと、被爆がどんなことだったかというところもあるし、広島の文化を取り上げてメディアで流してもらっているのもあるので、すごく世界の皆さんに伝わっていったかなと思います。

司　　会：　後ほど、神楽についてはさらに深く話していただきます。お二人、まずありがとうございました。続きまして、安芸府中のお二人にフリップを上げていただいて、青木さん

から順番に教えてもらえますか。

青　　木：　G7サミットを受けて、皆さんも思ったと思うのですけれど、広島の街を歩いていても、海外の人がいるのを見ることが確実に多くなったと思います。やはりG7サミットが、この平和を象徴する街である広島で開催されたことに、何か意味があると思いますし、国内に住んでいる私たち日本国民もですが、海外の方も一緒に、何か平和について考えることがあったり、それを深めてもらったり、何か行動を起こすきっかけになったならよかったなと、私はG7を受けて思いました。

司　　会：　三井さんはいかがですか。

三　　井：　私は、「届けたい、1人の少女の願い」と書いたのですが、この1人の少女というのは、広島でかの有名な、佐々木禎子さんのことです。皆さん知っていると思うんですけれど、佐々木禎子さんの像があるじゃないですか。あの像は、当時、佐々木禎子さんのお友達が、思いをはせてつくったものなんですね。その思いを受け継ぐべく、私たち安芸府中高校が紙芝居を通して、佐々木禎子さんの思いを届けたいという思いで、今まで一心に活動してきたのですが、G7サミットのお仕事をいただいて、綾瀬はるかさんと平和について語ってみたり、国際メディアセンターでは私たちの動画を流してくださり、その映像で、様々な場所で平和について触れてもらえたことで、少しでも禎子さんの思いが届けられたんじゃないかなと思って、これからも私たちは届けたいなと思っています。

司　　会：　平和を伝えるために、当然知事もいろいろなところで訴えていらっしゃいますけれど、これだけの若い世代が、これほどの熱量でやっているというのは、聞いていてどうですか。

湯 﨑 知 事：　すごくうれしいですね。今回のこのサミットの、我々の目的の1つに、若者の参画というのがあって、若者の皆さんにレガシーを残したい。それはサミットのいろいろな場面に参加してもらって、そして、そこで得るもの、受け取るもの、自分たちとして受け取るものがたくさんありますね。神楽もそうですし、平和のこともそうですし、そういうサミットのプロセスに参加してもらって、そして平和について自分たちも何かしらの活動をして、世界の皆さんに届けるということを実際にやってもらったのは、すごく大きな意味があると思います。

司　　会：　三井さん、実際、そういうサミットのメディアセンターの中で、自分たちの活動が伝えられたということに、自分の中で達成感とか気持ちの変化がありましたか。

三　　井：　この紙芝居を、英語と日本語で私たちは行っているんですけれど、英語で紙芝居をした際に、外国人の方から「感動したよ」とか、「こういうのがあったんだ」という感想をいただいたときは、思いが伝わったんだと思って、そういうときはすごくうれしくて、もっともっと世界に広めていきたいなと思います。

司　　会：　ありがとうございます。後ほどまた詳しく話しましょう。よろしくお願いします。
　では、御調高校のお二人もお願いしてよろしいでしょうか。「広島から世界へ」と来ましたが、これは。

宮　　地：　自分は、広島県でG7サミットが開催されたことで、各地域の特産品などを使った食べ物やお酒などを各メディアが取り上げてくれて、普段なかなか表に出ないような食べ物なども世界中にアピールできたので、そこがよかったなと思いました。
　また、平和記念公園などを訪れて、平和についても世界中が理解をしてくれたと思っていて、自分は広島で開催されてよかったと思いました。

司　　会：　確かにどこどこの首相がこれを食べたとか、スナク首相がカープの靴下とかあったじゃないですか。ああいうのを見るとうれしいですか、やっぱり。

宮　　地：　そうですね。自分は御調という地域にいて、なかなか特産品などをアピールしようと思っても難しい部分があったので、それを、G7サミットを通していろいろな世界に発信できたのはすごくうれしかったです。

司　　会：　延安さんはどうですか。

延　　安：　僕は、ちょっと今まで出てきた内容と違うんですけれど、「経済効果」というのを挙げました。いろいろなSNSやメディアで、G7サミットが広島で行われることでいろいろな経済効果があるんじゃないか。例えば、さっきも言ったようにメディア発信とか。各首相がここに来られるので、それに当たるセキュリティーの面で、広島県全体で経済効果があるんじゃないのかなと感じました。

司　　会：　知事、そういった意味では経済効果、額面もそうなんですけれど、ブランドとしても価値があったと思いますが、その辺を振り返ってどうですか。

湯 﨑 知 事：　メディアセンターなどでもたくさん、いろいろな広島の産品を食べてもらったりしましたけれども、すごくおいしいというふうに感じて帰っていかれた記者の皆さんもたくさんいらっしゃるんですよね。実際、それをまたニュースにして流してもらっています。あるいは、伝統芸能にしても、瀬戸内のこの素晴らしさ、あるいは中国山地の素晴らしさとか、そういうのが世界に伝わっていったというのは、広島のまさにブランド強化になるし、それを我々がつくっていたりするわけじゃないですか。平和発信もそうですけれども、それがまた広島の皆さまの誇りにつながると思うんですよね。

　特に、若い人がそこに参画をしてくれて、それがまたつながっていく、まさにレガシーですよね。ということで、全部がつながっているんですけれど、本当に大きな効果があったと思いますね。

司　　会：　誇りというところでいくと、延安さん、若い世代からして、サミットの報道をいっぱい見るじゃないですか。広島の名前が出てきて、誇りを感じる部分はどうでしたか。

延　　安：　いろいろな国があって、日本にも 47 都道府県あるんですけれど、そこで広島をピックアップしていただいて、自分も住んでいて、身近に感じられるじゃないですか。なので、誇りというか、自信、いろいろな期待というか、広島が世界に見られているんだなというのは感じて、誇りみたいなものは感じました。

司　　会：　この後、さらに特化して御調の話もしたいと思います。この後もよろしくお願いします。

延　　安：　お願いします。

司　　会：　続きまして、広島大学附属の谷村さん、お願いします。

谷　　村：　私は、「小さな 1 歩」にしました。このサミットで評価する点は、やはりバイデン大統領が、一時は G7 サミットをオンライン参加となる話も出た中で、原爆資料館を訪れて向き合ってくださったというのが、すごく評価するべき点だなと思ったんですけれども、私は中国新聞ジュニアライターという記者活動をしていて、その中で被爆者の方々がまだまだ足りないと。複雑な情勢で難しいことは分かっているんですけれども、もう少し寄り添える内容であってほしかった。期間の目安でも、まずは核廃絶の期間の目安でも立ててほしかったなと思いました。

司　　会：　もっとしっかり訪問してほしいとか、いろいろあったじゃないですか。谷村さんの感覚は、よくぞ資料館に来てくれたという感じなのか、複雑でしょうけれども、どんな感じですか。

谷　　村：　もう少し見てほしかったなという気持ちのほうが大きいですね。

司　　会：　そうですか。そういったところで、知事、今の意見を聞かれていかがですか。

湯 﨑 知 事：　今回の資料館の中というのは、完全に秘密になっていて、中で実際に首脳の皆さんが何を見て、どんな反応をしたかを見た人は、総理と通訳と外務省の職員が 2 人ぐらいと、あと被爆者の小倉さんしかいないんですよね。なので、もっと、どんな感じだったのだろうかというのをみんなが理解できるようになると、よりよかったのかなと思いますよね。

司　　会：　ただ、若者がこの問題意識というのは、たいしたものですよね。

湯 﨑 知 事：　そうですね。広島のいろいろな活動している立場として見ると、いろいろな思いというのが出てくるものだなと思いますね。

司　　会：　後ほど、さらに掘り下げていきましょう。よろしくお願いします。

谷　　村：　よろしくお願いします。

話題提供

司　　会：　さて、ここからは皆さんのプレゼンということになるんですが、順番に各校 1 組ずつプレゼンしていただいて、その後、知事も含めて皆さんとディスカッションをしていきたいと思います。

　まずは先頭バッター。御調高校、ソフトボール日本一おめでとうございます。

御調高校

宮地・延安：　ありがとうございます。

司　　会：　今日は、7 番センターの延安さんと、お隣り、西川龍馬さんにお越しいただいています。

宮　　地：　ありがとうございます。西川です。
司　　会：　似ているって言われますよね。
宮　　地：　言われます。
司　　会：　プレースタイルは似てきますか。打席で。
宮　　地：　西川さんみたいにたくさんホームランを打っています。
司　　会：　日本一ですからね。お二人から発表をお願いします。
延　　安：　広島県立御調高等学校の 2 年延安奏明と。
宮　　地：　宮地香弥です。
延安・宮地：　お願いします。
延　　安：　では、まず初めに、皆さん、この漢字、読めますか。「御調（みつぎ）」と読みます。御調町について紹介をしようと思います。

御調町は尾道市の一番北の部分に位置していて、特色はこの 3 つの中でもソフトボールが今は結構有名です。人口は 6,626 人と小規模な町です。御調町は山に囲まれていて、自然が豊かな部分でも有名なのかなと思っています。

次に、御調高校を紹介したいと思います。御調高校は、去年、創立 100 周年を迎えた伝統ある高校です。特徴としては、全校生徒 130 人と小規模なところと、男子ソフトボール部が、さっきも言ってくださったように日本一とか、全国レベルなところと、地域とのつながりが結構深く、地域とともに生活をしているような高校です。

男子ソフトボール部について紹介します。男子ソフトボール部は、現在 16 人と、マネジャー2 人で活動しています。今年の成績は、10 月に行われた「かごしま国体」で、広島県選抜で御調高校から 11 名の生徒を出して、優勝することができました。また、春に行われた中国大会も優勝して、夏のインターハイにも 13 年連続広島県代表として出場させていただきました。

宮　　地：　これからは、今、自分たちがやっているプロジェクトについて説明していきたいと思います。

今、自分たちが行っているプロジェクト名は、「御調から全国へ」です。まず、 9 月 15 日にマツダスタジアムに行って、御調町を紹介してきました。ここでは、御調の特産品などをアピールしてきました。

御調の特産品でいえば、キムチ、サツマイモといったものが有名で、それを使ったコロッケを販売して、全国にアピールできたと思います。

これが実際に行った写真です。御調町全体で御調を PR する動画を作成し、実際にマツダスタジアムでも流しました。見てください。

（動画視聴）

これを実際にマツダスタジアムで流してもらって、大きな反響がありました。それを経て、今からのプロジェクトは、フェスティバルを開催しようと思います。このフェスティバルは御調町など田舎を集めてしようと思います。田舎にはお米などおいしいものがたくさんあるんですけれど、埋もれていたり、出てきてない食材もあるので、それを使ったフェスティバルをしたいと思いました。

延　　安：　最後に、御調高校の「総合的な探究の時間」について、説明をしたいと思います。

御調町の地域活性化をテーマに勉強する時間です。その時間では、マイテーマを設定して、そこで御調町の地域の人と協力して、御調町の地域の活性化をどうしたらいいかというのを一緒に考えて取り組んでいくんですけれど、今回、宮地君が言ったように、御調町だけではなくて、活動の輪を広げようということで、広島県、そこから全国へという感じでやっていったのが、この田舎フェスティバルになります。

宮　　地：　ここからは、知事に質問です。田舎フェスティバルを実際にやろうと思うんですけれど、規模が大きいので何から始めていいのかが分からなくて、何から始めたらよろしいでしょうか。
司　　会：　湯﨑知事、お願いします。
湯 崎 知 事：　何から始める。これは難しい質問だけど、まず、どんなものがあるかというのは。
宮　　地：　御調町では、サツマイモとキムチを使って、どんどん活性化につなげていきたいと思っています。
湯 崎 知 事：　サツマイモとキムチだけじゃなくて、もうちょっといろいろあったらいいかもしれないね。御調のおいしいものとか、柿とかも有名じゃない。それをいろいろ取りそろえる

ところから始めていったらどうですかね。どんなものがあるかを、まず、発掘をしていく。

司　　会：　それと、実はさらにブランド化を進めるために、谷村さんが考えてきてくれたんですよね、自分事として。ちょっと発表してもらっていいですか。

谷　　村：　はい。絵もついています。これはスイートポテコです。やはり御調地域というのは、サツマイモが有名じゃないですか。だから、サツマイモと今人気の VTuber を使った観光を掛け合わせて、観光雑誌をつくるというのは、どうでしょう。

宮　　地：　すごくいいです。

谷　　村：　ぜひ使っていただきたいです。

宮　　地：　ありがとうございます。

司　　会：　これ、誰がつくったんですか。スイートポテコは。

谷　　村：　妹が描いたんですけど。

司　　会：　間口を広げていろいろなものを並べるか、サツマイモ１本勝負でいくかという、知事、この辺の判断って悩ましい舵取りだと思うんですけど、どうですか。

湯崎知事：　グルメフェスティバルをやろうと思ったら、やっぱりいろいろあったほうがいいかな。何かを全国に伝えていきたいというんだったら、絞ったほうがいいかもしれないですよね。これ、いいんじゃないですか。全て、耳というか、しっぽもサツマイモ。

司　　会：　すごい、大豊作になっていますね。

谷　　村：　はい。豊作アピールです。

司　　会：　これで、全国にまず突破口を。1番バッターの仕事をしてもらって、フェスで3番バッター、4番バッターのような仕事をしてもらうというような感じ。ほかに意見はありますか。フェスとか、こういう人が来たらとか、こういうことをやったらとか。青木さん、どうですか。

青　　木：　誰か芸人さんとか芸能人さんを呼んでみて、話題性を集めるのはいい案だと思います。でも、御調について私はそんなに詳しくないんですけれど、広島出身の芸人さんを呼んでみるのはどうですか。

宮　　地：　広島出身の人を呼ぶことでアピールができるといいと思うので、参考になりました。ありがとうございます。

青　　木：　ありがとうございます。

司　　会：　攻め口、いっぱいありますね。広島出身、御調出身とかサツマイモ大好き芸人というのもありますし。やりようはいろいろ。知事、これ、魅力の核があると広げようというのはいろいろあるんですね。

湯崎知事：　そうですね。どう料理するかということなので。料理の材料があると、中華でも和食でもフランス料理でも、何でもいい味付けにしてね。こういう VTuber 味付けもあるし、いろいろいいんじゃないでしょうか。

司　　会：　かなり濃い口の味付けができましたからね。

湯崎知事：　これは若者ふうの味付けですよね、VTuber。

司　　会：　新しい発想。延安さんも、今日知事に聞いてみたいことがあるということで。

延　　安：　僕から聞きたいことは、僕は今、御調高校の生徒会長をやっていて、コロナでなくなった行事とか企画を復活させたいと思っているんですけれど、企画を主導していく上で、周囲の人にどのような思いを具現化したらいいのかと、広島県のリーダーである湯崎知事にそういう主導でやっていくために大切なことは何かを聞きたいです。

湯崎知事：　よくみんなと話し合いをするということと、自分としても何か核を持っているということが大事じゃないかと思います。そういう、みんなが持っているいろいろなものが共鳴し合い、それが大きくなっていくと思うんですよね、特にこういう企画だったりとか。

　自分が真っ白だと、これもまたなかなか難しくて、最後にどうしていったらいいだろうというのが分からなくなってしまうことがあります。自分も何かしらの核を持って、それは何でもいいんだけれど、人のそういう核も探していって、それを組み合わせていく。あるいは融合させていくとかね。そうなると、素敵なものができるんじゃないかと思います。

延　　安：　分かりました。ありがとうございます。やってみます。

司　　会：　去年まであったことをずっと続けていくんだったら、ルーティーン的にできるじゃないですか。途絶えたものをもう１回というのは悩むと思うんですけれど、どんなことで一番悩むんですかね。もう１回やっていいのかな、どうなのかなって悩む理由って何で

すか。

延　　安：　悩む理由は、いつなくなったのかをまず調べて、それで、生徒が今復活させたいものが何かをアンケートを取って、そこからまた先生にお願いをしたり、その工程一つ一つが結構重要なんですけれど、自分の中でも先生にお願いして、すぐすぐにはできないと思うので、それを実現させるため、生徒会でも話し合ったりとかが難しいかなと。

司　　会：　それは立派に政治のようなことを、住民の意見を聞き、束ね、議会に諮るみたいなことを、ある種やってくれているじゃないですか。

湯 﨑 知 事：　そうですね。その復活させたいとか、これを実現したいという思いが、多分、延安君の核だと思うんですよ。それを忘れないで、どうしても実現するんだというのを貫いてもらったら、そこにまた反応する人たちもたくさん出てくるんじゃないかと思います。

延　　安：　頑張ります。ありがとうございます。

司　　会：　谷村さん、もしよかったら、共感していただいたら、スイートポテコをお二人に譲ってあげてもらってもいいですか。

谷　　村：　もちろんです。

司　　会：　いいですか。じゃあ、せっかくなので原本の贈呈をお願いします。

延　　安：　ありがとうございます。

司　　会：　調印式みたいになりましたね。スイートポテコが今、御調にわたりました。ぜひ頑張ってください。ありがとうございました。

安芸府中高校

司　　会：　続いては、安芸府中高校の青木さん、三井さん、お二人お願いします。

青　　木：　私たち安芸府中高校では、先ほども話にあったんですけれど、日本語と英語で紙芝居を使って、平和を伝えるという活動を続けてきました。今日は、その一部分ではあるんですけれども、日本語と英語を織り交ぜながら、皆さんにお見せしたいと思います。それでは、どうぞ。

（紙芝居「原爆の子　さだ子の願い」実演）

三　　井：　この紙芝居は、府中町在住の中村由利江さんが、2000 年から 8 月 6 日に平和記念公園の原爆の子の像の裏手で、1 人で紙芝居活動を行ってきました。海外の方にも理解してもらえるよう、2002 年に府中町国際交流協会の会長である小柴浩美さんが紙芝居を英語に翻訳しました。

青　　木：　安芸府中高校では、2015 年から有志生徒がボランティア活動として、8 月 6 日の紙芝居に参加するようになりました。また、去年から国際科 1 年生の英語の授業にも紙芝居を取り入れ、昨年 7 月にインドネシアやフィリピンの姉妹校の生徒を対象に、初めてオンラインで英語紙芝居を披露しました。

三　　井：　コロナで様々な影響がありましたが、オンラインの世界が広がりました。安芸府中高校国際科では、インドネシア、フィリピン、ハワイ、オーストラリアの姉妹校生徒と年 10 回以上のオンライン交流を行っています。オンラインでも、平和活動が私たちをより簡単に世界に結びつけてくれたと考えています。

青　　木：　また、昨年の 8 月 6 日には、3 年ぶりに平和記念公園での紙芝居活動も復活し、対面での活動も再開しました。現在では、オンラインと対面の両方で活動を行っています。地域の小学校や中学校、公民館などで、対面で紙芝居を披露したり、オンラインで世界の人々に紙芝居を行っています。

三　　井：　昨年の 10 月 25 日、禎子さんの命日には元アメリカ大統領、オバマさんの妹のマヤさん、そして禎子さんのご親族をオンラインでお招きし、インドネシア、フィリピン、ハワイの姉妹校生徒に向けて紙芝居を披露しました。マヤさんは私たちの紙芝居を称賛してくださり、次の言葉を私たちに託してくれました。

青　　木：　「この活動を世界に広めてほしい。あなたたちが平和の架け橋となってほしい」。この言葉は、私たちに更なるやる気と使命感を与えてくれました。

三　　井：　そして、G7 広島サミットで紙芝居を披露したいという目標ができました。

青　　木：　今年の 2 月には、外務省主催のカケハシ・プロジェクトで本校の生徒 9 名がワシントンに行き、英語で紙芝居を披露し、おりづるワークショップを行いました。私はおりづるワークショップを担当しました。初めて折り紙をする同世代の生徒たちに複雑なおり

づるの説明を英語でするのはとても難しかったですが、一生懸命聞いて折ってくれたおりづるを、とても大切にしてくれているのを見ると、達成感はとても大きかったです。オンラインではなく、実際に対面でアメリカの生徒たちと平和についての意見交換をしたことは、私たちにとって、とても貴重な体験の1つとなりました。

三　　井：　そして、私たちの夢であったG7広島サミットのお仕事をいただきました。それは、今年の2月に開催された、「G7広島サミットユースフォーラム　綾瀬はるかと考えてみよう」という大きなステージでした。そこでは、1,000人以上の中高生の前で紙芝居を披露しました。また、4月にはC7市民サミットでも英語紙芝居を披露する機会をいただき、世界の多くの方々に平和の尊さを伝えることができました。

青　　木：　さらに、G7サミットの日に、国際メディアセンターで私たちが演じた紙芝居の動画を流していただき、全世界のメディアの方々に見てもらえて、すごくうれしかったです。

三　　井：　8月には、国際科2年生の生徒がオーストラリアの姉妹校で、対面で紙芝居を披露しました。私は、「トビタテ！留学JAPAN」から奨学金をもらい、イギリスで紙芝居の読み聞かせを行ってきました。

青　　木：　このような私たちの活動は、この3年間で30回以上もテレビで紹介されました。これにより、紙芝居の復刻版も出版され、今年の10月には、紙芝居の全国大会において優秀賞もいただきました。12月には、インドネシアとフィリピンの姉妹校の生徒が本校を訪問する予定です。来年3月には10名程度の生徒が国費留学生として、ハワイの姉妹校に2週間程度滞在します。オンラインと対面のハイブリッド型国際交流により。

三　　井：　1人の少女の「生きたい」と願った気持ちを、紙芝居を通して世界の人々に伝えていきたいと思っています。海外の生徒と様々な活動ができるのは、全県立高校に海外との姉妹校をつくるプロジェクトを進めてくれた湯﨑知事のおかげです。ありがとうございました。

青　　木：　私は、今までこの紙芝居の活動を続けてきた中で、禎子さんのご遺族や被爆者の方々とお話しする機会もありました。その中で心に残っているのは、若い世代が平和を後世に伝えていってほしいという皆さんの願いです。広島に原爆が落とされてから78年がたった今の時代ですが、あの日、広島で何が起こったのかを語れる人は、年々少なくなってきています。戦争の悲劇を2度と繰り返さないためにも、私たちが責任をもって歴史を伝えていくべきだと強く感じます。

三　　井：　悲しいことに、今も紛争が収まることのない世の中です。私が平和の尊さ、命の大切さ、戦争の悲惨さを、紙芝居を通じて世界に訴えかけていきます。

青　　木：　私たちが今ここにいられるのは、これまで一緒に頑張ってきた仲間たちや、裏でサポートしてくださったたくさんの方々のおかげです。これからも安芸府中高校は世界に向けて大きく飛躍していきます。

青木・三井：　ご清聴ありがとうございました。

司　　会：　見事でしたが、橋本さん、代表して感想どうですか。同年代の人たちの紙芝居。

橋　　本：　僕は広島に住んでいて、平和のこともちょっとは勉強していたので、こうやって平和を世界に広めていくことは、すごくいい活動だと思いました。

青木・三井：　ありがとうございます。

司　　会：　県としても教育委員会としても、学校ごとに特色とか方向性とかプロジェクトを打ち出していくんですけれど、こういう形で実を結んでいったのを、知事、実際に形でご覧になっていかがですか。

湯 﨑 知 事：　さっきの話で、若者がG7の何かしらのプロセスに参加してもらうとか、あるいは姉妹校提携とか、そういうものに実際に参加してもらって、皆さんに与えているインパクトと、それから皆さんが世の中や世界に与えるインパクトというのを実感として感じることができたので、とてもうれしかったですね。

司　　会：　知事はちょうど明日から移動のタイミングで、核兵器禁止条約第2回締約国会議参加ということで、思い的には、こういう思いも背負ってということになるんでしょうけれども、いかがですか。

湯 﨑 知 事：　そうですね。広島の願いというものを、1歩でも近付けるように頑張っていきたいと思います。

司　　会：　青木さん、意見もあるんですよね、青木さんとして。

青　　木：　はい。11月27日から核兵器禁止条約の第2回締約国会議が開かれますが、政府は参加の意向を示されませんでしたが、湯﨑知事は参加されるというのを聞きました。やはり、唯一の被爆国である日本だからこそ参加するべきだと私は思うんですけれど、その

参加に向ける湯﨑知事の思いを聞いてみたいです。また、広島に住む私たち高校生が、何か平和をつなげることに向けてできることというのはあると思いますか。それを聞きたいです。

湯 﨑 知 事： まず、高校生の皆さんができることについては、既にやってもらっていて、そういう意味ではすごくレベルが高いと思うんですよね。それは継続してほしいんですけれど。でも、大変だよね。紙芝居も用意して、実際に海外にも行ったりしてというのは、なかなかみんなができることではないと思うんですけれど、一人一人にできることというのはそれぞれにあるので。

一番大事なのは、あれは他人のことだよねというのではなくて、自分もかかわっていることじゃないですか。広島に住む人間として、否応なく背負っている部分もありますし、今まさに、我々は核兵器と一緒に存在しているわけですよね。これがどこか別の世界の話ではなくて、まさに今、誰かが核兵器を使うかもしれない、それで世界が変わってしまうかもしれないという事態であることをよく認識して。自分ができること、何でもいいと思うんですよね。何か平和について考えるということだけでも大きく違うし、政治のプロセスの中で投票するとか、そういうことでも大きく変わってくる。みんなそろそろ 18 歳になると思うんだけれど、一つ一つできることは何だろうというのを考えて、他人事としてではなくて自分事として何かやってくれるとすごくうれしいなと思います。

核兵器禁止条約ですけれども、基本的には禁止条約の今回締約国会議なので、皆さんある意味で仲間なんですよね。今回、県として訴えていこうと考えているのが、1 つは核兵器というものの捉え方として、非人道的な捉え方、安全保障上の捉え方とあるんですけれど、これはこれまでの伝統的な捉え方なんですよね。非人道的というところから、核兵器禁止条約になっているし、安全保障という観点からは、核兵器を持っている人たちとのせめぎ合いになっています。もう 1 つ、持続可能性という観点があって、核兵器が持続可能性に非常に大きな影響を与えているという認識を、もっと広く持ってもらう。例えば気候変動とか、あるいはコロナのようなパンデミックと同じように、ひょっとしたら人類を滅ぼすものかもしれない、あるいは使わなくてもいろいろな影響があるという、そういうことを認識してもらう。その仲間づくりということ。

それからもう 1 つは、安全保障の面で、核兵器を廃絶するという目標はあるんだけれど、でも、廃絶したときにどのように安全保障を考えるのかということが、ちょっと空白地帯になっているので、世界のみんなで考えていこうよということをテーマに、訴えていこうかなと思っています。

司　　会： 三井さん、聞けばいろいろあって。核兵器廃絶、でも、そこが全てのゴールではなくて、その後、まだやらなければいけないこともあるということで、今の話を聞いてどうでしたか。

三　　井： 核兵器ゼロという言葉はよく聞くのですけれど、全くゼロにするわけじゃないというのを聞いたときに、確かにそうだなということは感じましたし、でも、被爆者からしたら核兵器はなしにしてほしいという思いもあると思うし、そこはやはり難しいところではあると思うんですけれど、さっき湯﨑知事がおっしゃった、私たち高校生のできることといえば、被爆者の声を聞いて、その声を後世に伝えていくということが私たちにできることなので。少しでも核兵器ゼロ、いい方向に近付いていけるように私たちも協力していけたらいいなと思います。

司　　会： 谷村さん、何か今の話に刺激を受けて、何か自分として思うこととか、こんなことをやってみたいなと思うことが、もしあればなんですけど、どうですか。

谷　　村： 実は、安芸府中高校さんの紙芝居とユースフォーラムを拝見いたしました。自分はあまり人前でそういうことをやったことがないので、自分も紙芝居とかにもチャレンジしてみたいです。

青　　木： ぜひチャレンジしてください。

三　　井： 一緒にやりましょう。

司　　会： 一緒にやってくれたら、どんどん広まりますもんね。

谷　　村： 一緒にやりましょう。

青木・三井： やりましょう。

司　　会： 妹さんにも協力してもらって。

谷　　村： はい。

司　　会： さらにパワーアップして。よろしくお願いします。こういうつながりができていく

と、知事、2 が 3 になって、3 が 5 になり、何億になれば、変わるわけですね、世の中。
湯 﨑 知 事： そうなんですよ。池に小石を投げると、必ず波紋が広がっていくじゃないですか。それが、小さくても広がっていくわけです。たくさん集まると本当に大きな波になっていくということで、小さいからこれは意味がないということではないんですよね。
司　　会： いいところに石を投げましたね。
青　　木： ありがとうございます。

加計高校芸北分校

司　　会： 続いていきたいです。次は、芸北高校の林谷さん、橋本さん、お二人お願いします。
林谷・橋本： お願いします。
林　　谷： 加計高校芸北分校の林谷と橋本です。まず、芸北高校について紹介します。加計高校芸北分校は、県内唯一の分校で、1 学年 40 人、2 学年 21 人、3 学年 21 人、全校生徒 82 人の超小規模校です。地域とのかかわりの強い活動を総合的な学習の時間の中で行っていて、競技スキー部や農業部、神楽部などの珍しい部活も充実しています。

まず、全校生徒 82 人の小規模校というところでは、2 年前には廃校の危機に陥るほど生徒が減少して、私たちも芸北分校に入学できるか分からない状況でした。その後、先生方や先輩たちの懸命な広報活動によって、今年度の入学志願者は定員を超えて、入学者は最大人数の 40 人となりました。

そして、これからも芸北分校の認知度を、広島だけではなく全国に広めていき、芸北分校という学校を残していきたいと考えています。後ほど湯﨑知事に少し質問してみたいと思っています。

続いて、地域とのかかわりの強い活動についてです。芸北分校は、地域の人とのかかわりをとても大切にしています。芸北分校はとても小規模校で、芸北分校がある北広島町芸北という場所も、非常に人口も少なくて小規模なところなのですが、小規模だからこそかかわりを大事にしています。例えば、地域の行事のボランティアでは、芸北分校生が積極的に参加して、たくさんの地域の方々に還元できるように、たくさんの活動を行っていたり、地域の学校や企業の方々との「総合的な探究の時間」を行っていて、今年、私たちは 9 月頃に、地域の小学校のインターンシップで、小学校の先生の仕事を少し体験してきました。

続いて、神楽部など珍しい部活についてです。ここで、私や橋本君の所属している神楽部をピックアップさせていただきます。

現在、3 年生 4 人、2 年生 6 人、1 年生 10 人の合計 20 人で活動しています。地域のお祭りや小中学校の芸術鑑賞会などの公演を中心に行っています。過去には、第 41 回全国高等学校総合文化祭郷土芸能部門最優秀賞、文化庁長官賞を受賞、第 27 回全国高等学校総合文化祭優秀校として東京の国立劇場で公演を行ったりもしました。

芸北神楽というものを私たちはしているんですけれど、芸北神楽を知らない人もいらっしゃると思うので、芸北神楽について説明させていただきます。

芸北神楽とは、秋の実りに感謝し、奉納する舞いに神話や伝説を取り入れて神楽化したものです。島根県の旧舞といわれるものと、石見地方から終戦後に伝わった新舞といわれるものが北広島町で合流し、この地方の民俗芸能として継承されています。

ここで、生まれたときから神楽団に所属している、生粋の神楽っ子の橋本君に神楽の「楽」というメロディーをつくっている 1 つの、笛を吹いてもらおうと思います。

（笛演奏）

林　　谷： これが、芸北神楽など神楽で使われている楽のメロディーの中心となっている笛です。今回私たちが神楽の「ヤマタノオロチ」という演目で使っている大蛇を持ってきました。私は大蛇の役をやっているので、この場ではあまり場所がないので、実際に大蛇全体をつけることはできないんですけれど、「かしら」という、この頭だけを動かすことができるので、少し動かしてみます。あまり盛り上がりはしないんですけれど、こういうふうに動いているんだなというのを見てもらえればと思います。
司　　会： 橋本さん、解説をお願いします。
橋　　本： この頭は紙でできていて、重さは約 1.5 キロ位あります。実際に動かしてもらうと、こういうふうに動かして実際のヘビのように口でかむ所作とかをしています。

林　　谷：　この神楽をやっている神楽部員の気持ちは、伝統的な神楽をずっと受け継いでいきたい。神楽のよさを県外・全国・世界へ発信したい。たくさんの人に神楽を知ってもらって楽しんでもらいたいという、とても大きな気持ちがあります。ですが、神楽は意外と知られていないんです。

　県外からの留学生や友人に部活の話をすると、「神楽部って何？」「神楽って何？」と聞かれることが多くて、実際に芸北分校に入ってきた県外からの入学生も、芸北に入って初めて神楽を見たという人も多いです。

　ちなみにこの中で神楽を見たことがない人っていらっしゃいますか。結構よく見るという人はいらっしゃいますか。

林　　谷：　やはりあまり身近ではないし、伝統芸能というと難しいイメージもあって、あまり気軽に見にいけないというイメージもあると思います。私たちもたくさん活動をしているんですけれど、やはり田舎の小規模校の力だけでは認知してもらえないところもあるので、どうしたら神楽をたくさんの人に知ってもらえるかというのを聞いてみたいと思っています。

司　　会：　知事、もし何か思いつくことがありましたら、お願いできますか。神楽を広めるために。

湯 﨑 知 事：　神楽を広めるためということも含めて、広島市内で定期公演というのをやっているじゃないですか。ああいうところにたくさんお客さんに来てもらうとか、あとは神楽の日には、今年もやったと思うんですけど、広島駅の地下の広場や、人通りの多いところで公開公演をやったり、そういうのはとてもいいんじゃないかと思いますけれど。

司　　会：　ある種、地域にあるものをもっと知ってもらいたいというのは、御調高校と思いが一緒だと思うんですけれど、宮地さん、どうですか。同じ方向かなとか、コラボしてもとかいろいろあると思いますけれど、どんなことを思いますか。

宮　　地：　しっかり全国に広めていきたいと思われていて、身近でも知らない人がいる中で、どうやって広めようかなということを、学校全体で考えられているのがすごいと思いました。

司　　会：　青木さんはどうですか。実際に広めることに紙芝居は成功していますけど、こうやったら広まるなど、何かアドバイスがあったら。

青　　木：　私自身が島根県の出雲出身で、石見神楽などを小さいころに見ていましたが、日本の中でも日本の伝統芸能などがだんだんすたれているという事実もあると思います。私たちはSNSという媒体を介してこの活動を世界に広めてきたので、公式インスタなどで大々的に発信したり、あとは定期公演をしたりしているのであれば、実際にまちなかに広告などを張り出して、よりたくさんの人に知ってもらうというのも効果的だと思うので、ぜひやってみてほしいと思います。

司　　会：　参考になりました。ありがとうございます。橋本さんも、神楽のみならず知事に今日聞いてみたいことがあるということで。

橋　　本：　神楽はあまり知られてないので、SNSを通していろいろなところに広めていきたいと思っているんですけれど、すぐ広まるわけではないので、小規模校で人が少ないので、どのようにしたらもっと広めやすくなるのかというのを聞いてみたいなと思っています。

司　　会：　廃校の危機もありましたもんね。

湯 﨑 知 事：　そうですね。SNSなどは継続して、YouTubeもあると思うんですけれど。VTuberもあるかもしれないけれど。あとはRCCに頼んで番組をつくってもらうというのは。

司　　会：　そういうやつですね。気軽に請け負うなって話ですけど、どんどん言ってきてください。

林　　谷：　じゃあ、近いうちに。

司　　会：　はい。全部、「イマナマ！」でやってくれると思うので。そのための番組ですから。

湯 﨑 知 事：　そうですよね。でも、昔と比べると、神楽は随分広がってきたと思いますけどね。どうですかね。

司　　会：　でも、実際これ、ただやりますよっていう安請け合いじゃなくて、我々メディアや、一つ一つの企業なども、こういったものを掘り起こして、ちゃんと伝えるぞという、それこそ志と覚悟じゃないですけれど、そういうものは必要なのでしょうから、どんどんアタックしたほうがいいと思いますね。

湯 﨑 知 事：　やはり、「芸北分校が廃校の危機から立ち上がって、神楽を広める」みたいなストーリーができるじゃないですか。

司　　会：　そうですね。本が書けますね。確かにそう思いますね。どうですか、延安さん、似たようなシチュエーションもあると思うんですけれども、感じたこととか。

延　　安：　実は、御調町にも「みあがりおどり」という伝統的な踊りもあって。それを継続していくために、保育所からそれを踊って地域のお祭りなどで披露するということをずっと昔からやっています。それと同じように、神楽も高校から始めるのではなくて、橋本さんのように小さい頃からずっとやっていくことで、それでまた次の代の人たちに伝えることでもっと広まるし、いろいろな人が言ったように、イベントやSNSを使って共有する、こういうものがあるんだというのを伝えるのもとてもいいと思います。

司　　会：　やりよう、というか方法はすごくある時代だし、やりようのある世の中だと思うんですけれど、改めて林谷さん、今日いっぱい意見を聞いて、どんなことを感じましたか。

林　　谷：　さっき御調高校さんがおっしゃった田舎フェスティバル。芸北もとても田舎なので、ぜひ一緒に参加させてもらって、芸北の農産物もいっぱいあるので、それも含めて、そこで神楽も発信して、SNSも存分に活用して、いろいろな人にできるだけ広めていけたらいいなと思いました。

湯 﨑 知 事：　あと思うのは、芸北分校も姉妹校があるでしょう。そこのみんなに、神楽を見せたりしているのかな。

林　　谷：　私たちはまだ1年生なので、活動がまだ半年くらいしかできてないので、あまりわからないのですが、これから本校である加計高校にもたくさん知ってもらって、それをきっかけに広げていければいいなと思います。

湯 﨑 知 事：　僕らはメキシコのグアナファト州と友好連携しているんですけれども、5年前か6年前に神楽団の皆さんとメキシコに一緒に行って舞ってもらったんですよね。すごいスタンディングオベーションですよ。それからブラジルに行って、ブラジルでもやったんですけれど、ブラジルは広島県人会があって、広島県人会には神楽部があって、神楽をやっている人たちがいて、その人たちと一緒にまた共演してやったんですけれど、そのときもスタンディングオベーションで。ラテン系の人には、特にめちゃめちゃ受けるんですよね。だから、日本だけじゃなくて、海外も視野に入れてやってみたらいいんじゃないかと思いますけどね。それこそZoomとかで見せたりするだけでも、随分違うと思いますし。

司　　会：　とにかく石を投げれば、自分が思ってないところでこれがヒットする可能性があるかもしれないということなので、若いので、どんどん、どんどん、投げ続けてください。

林　　谷；　はい。ありがとうございます。

司　　会：　ありがとうございました。

広島大学附属高等学校

司　　会：　お待たせしました。広島大学附属高等学校、谷村咲蕾さん、よろしくお願いします。

谷　　村：　では、始めさせていただきます。私の提案は、平和×清掃というテーマです。まずは簡単に活動紹介をさせていただきます。

私は、広島大学附属高等学校のユネスコ班という部活動に所属しています。今年は、宮島ビーチクリーン、平和の鐘を鳴らそう、SB Student Ambassadorというものに参加し、SDGsや平和関係の活動をしています。また、私は個人的に中国新聞ジュニアライターという活動もしています。ジュニアライターは2007年から活動を開始しました。

どんなことを取材するかというと、月1回掲載する「記憶を受け継ぐ」というテーマで、被爆者の方の被爆体験を取材させていただいています。そして、「ジュニアライターがゆく」というテーマで取材をしていて、以前はパレスチナ難民支援を行う国連機関のUNRWAの方にも取材させていただきました。

そして、サミット前にG7参加国の大使にも取材しました。私が担当したのは、アメリカのエマニュエル駐日大使とドイツのフォン・ゲッツェ駐日大使です。フォン・ゲッツェ駐日大使は、平和と安全のバランスを保つために核抑止は重要だと述べられて、食料、エネルギーなど取材を通して複雑な事情を目の当たりにして、発信だけではなく、別のアプローチもする必要があるのではないかと思い始めました。

次に、ユネスコ班が活動しているスポGOMI甲子園について説明します。スポGOMI甲子園は、全国の高校生が各エリアでごみ拾いを競い合う大会で、ごみの量が一番多いチームが優勝となっています。ただ、優勝したのは私のチームではなく、同級生の別のチームです。そして、そんな中でごみ問題に興味を持つようになり、広島県の取組を調べ

てみると、「2050 輝く GREENSEA 瀬戸内ひろしま宣言」というものを見つけました。このような活動例がある中で、広島の特徴を生かしていて、技術面からサポートできるのは、県という規模だからこそという魅力があるなと思いました。

ところが、「海岸で」というのが多くて、スポ GOMI の例のように、まだ街中では普及していないな、もう少し街中にクローズアップした政策ができないかと思い、環境から平和を考える、「平和×清掃」というものを考えました。

ここで提案です。「スポ GOMI 街中プロジェクト HIROSHIMA」。この取組は、人の多い夏休みシーズンに行います。場所は広島市、福山市、呉市の海に近く、人口が比較的多い都市のごみが集まりやすい商店街や公園付近で行います。表彰はキッズ部門、学生部門、一般部門の中で、ごみの重さで上位 3 組に賞状と特典の贈呈を行います。その特典には、広島要素を盛り込みました。キッズ部門 1 位、湯﨑知事と名産品試食会招待券。学生部門 1 位、湯﨑知事とレモン収穫＆試飲会招待券。一般部門 1 位、湯﨑知事と県庁ツアー＆座談会招待券。いかがでしょうか。

そして、この取組はひろしまビジョンの基本的な考えにも通じると思っています。メリットをこうやって当てはめてみると、身の周りのごみが減り、海洋汚染の原因が減って安心。そして、環境問題対策への積極的な姿勢。そして、県知事の特典で広島の魅力を再確認して誇りを持てる。そして、広島の魅力をもっと広め、生かしたいと思う人や広島県民として得意な分野で貢献したいと挑戦するようになるのではないでしょうか。

最後に、なぜ清掃が平和につながるのかを説明します。皆さんは SDGs ウエディングケーキモデルというのをご存じでしょうか。そこに当てはめてみると、平和の下に海洋プラごみ問題となるのが分かります。ということは、いってみれば、平和の基盤をつくるのは、環境なのではないでしょうか。環境保全のための清掃、長い目で見れば、平和をつくる社会の混乱や戦争の原因を防ぐきっかけになるのではないかと思っています。ご清聴ありがとうございました。

司　　会：　スポ GOMI はみんな賛同だったんですけれど、湯﨑知事、かなり知事の稼働率が高い設定になっていましたけど、そこら辺はどうですか。

湯 﨑 知 事：　全部の賞品になって。

司　　会：　どうですか。何か力を貸したいなとか。

湯 﨑 知 事：　とてもいい活動ですよね。今、海ごみに取り組んでいるんですけれど、やっぱりポイ捨てで出るものというのはたくさんあって。それは海に捨てているのか、川のそばで捨てているのが海に流れ出しているのですけれど、街中でも同じようなことをやっているわけですよね。だから、海だけに捨てているとか、川だけに捨てているわけじゃなくて、街中でも捨てているのが、海へいったり川へいったりしているんですけれど、本当に全体できれいにしていかないと、海もきれいにならないし、街中がきれいになると、本当に誇りも増しますよね。きれいな街って誇りに思えるじゃないですか。

司　　会：　平和からこう来るかと思ったんですけれど、三井さん、平和をテーマでやってきて、まさかここととひっつくかという感じもあったと思うんですけれど。

三　　井：　本当に、私たちは今まで平和の思いを受け継ぐとかそういう活動だったんですけれど、平和と清掃を結び付けるという案がすごくて。先ほどのプロジェクトに、呉市と書いてあったんですね。私は呉市出身で、参加できると思って。特典をゲットするために私も参加しようと思いました。

司　　会：　青木さんはどうでした？

青　　木：　参加のときに 3 つの市が出ていて、私はその市には所属してないので、ぜひ 3 つの市に通っている高校生も参加 OK と、そういうふうにしていただければ、学校を媒体として参加できるので、すごく楽しそうな企画だと思いました。なかなか斬新なアイデアをつくるのは難しいと思いますけれど、すごく面白かったので、ぜひ企画していただきたいと思います。

谷　　村：　もちろんです。ありがとうございます。

青　　木：　ありがとうございます。

司　　会：　これだけ論理的に組み立てられるのがすごいと思ったんですけれど、一方で、谷村さん、湯﨑知事に聞いてみたいことがあるということで。

谷　　村：　実は、今年の 8 月 6 日平和記念式典にその場で参加させていただいて、そのときにスピーチにすごく感動したんです。その中で、安定・不安定のパラドックスという言葉が出てきたと思うんですけど、その解説と意図を教えていただきたいです。

湯 﨑 知 事：　安定・不安定パラドックスというのは、核抑止というものが、お互い核兵器を持って

いることによってお互いを攻撃しない。それで安定を図るというのが、核抑止の考え方ですけれども、今のロシアとウクライナの関係に見られるように、核兵器を持っている国が非核兵器国に侵攻したときに、それを止められない。それは不安定ですよね。不安定をつくること。だから、核兵器が平和を保つといいながら、実は不安定をつくっていくことを止められない。パラドックスって逆説とか矛盾ということじゃないですか。そのことを指すのが、安定・不安定パラドックスと。

これはもともと核抑止の議論の中で指摘されていることなんですけれど、実際にこの核兵器があるから、平和が保たれているのではなくて、核兵器があるから、紛争が止められない事態になっているということを指しています。

谷　　村：　解説ありがとうございます。

司　　会：　だから、安定の究極は、核兵器ない、ない、ない、ない、ないの安定なんですけれど、現実を考えると、ある、ある、ある、あるという安定の仕方もあったりとか。谷村さん、改めて平和の、やることは、訴えることというのは皆同じでも、最終的に何か問題が残る難しさとかって、どんなふうに感じていますか、いろいろ勉強する中で。

谷　　村：　やはり複雑な情勢というのは、自分１人の力ではなかなか変えられなくて。しかも食料やエネルギー、イデオロギーなどの問題も絡んできているじゃないですか。なので、まずは間接的に別のアプローチというのもしていきたいなと思っています。

司　　会：　そして貴重な体験の、サミットの前に３カ国の大使と接することができた。実際、接してみてどうでしたか。感じたこととか。

谷　　村：　めちゃ緊張しました。やはり立場上というのもあると思うんですけれど、核抑止論の考えが結構多くて、そこをどう核廃絶にもっていくかというのを、もうちょっと考えていきたいなと思います。

司　　会：　知事、こうやって考えると、平和の問題もそうなんですけれど、G7 も首脳だけの問題ではなくて、これだけ皆さんがかかわって当事者意識を持つことで、こんなに実り多いものになるということで、改めて広島開催をどんなふうに振り返りますか。

湯 﨑 知 事：　まさにそのとおりですよね。今回広島であったことによって、普段だったら首脳の皆さんがどこか遠いところで遠い話をしているように感じるかもしれないけれども、実際には我々が今暮らしている世界から、首脳が話し合っていることに全部つながっているわけですね。それを何となく実感できたのではないかと思うんですけれど、それが大事なことで。だから、人ごとではないというのは、まさにそういうことですね。自分たちの暮らしとすごくかかわっていることなんだと。

だからこそ、首脳が話して何かしてくれればいいや、ではなくて、自分たちがそこに行動をしていかなければいけないということだと思うんですね。それを感じることができたということは、すごく大きなことだと思いますね。それを本当に広島でやってよかったと思うし、それが若者の皆さんに残っていくレガシーだと思います。

司　　会：　やったら何か若者に残るのでは、残したいなと思うものが、知事をはじめ皆さんにあったと思うんですけれど、これだけ残っていると、今日の肌感覚など、どんなふうに感じましたか。

湯 﨑 知 事：　本当にうれしいですね。こうやって実際に皆さんのお話を聞けて、本当に一つ一つ残っているものがあるなと、とてもうれしいです。

司　　会：　今日の模様は、夕方の RCC のニュース、そして月曜日の「イマナマ！」の中で放送されるということです。林谷さん、今日は、神楽、スイートポテコ、平和、全部関係ないようで結構つながっていたと思うんですけれど、どんなふうに感じましたか。

林　　谷：　私たちは、とても身近な神楽というものを題材にしてお話しさせてもらったんですけれど、皆さんの発表は世界につながるような、私と同年代の方々がお話ししているとは思えないほどすごいお話ばかりで、私も皆さんに刺激を受けたので、もっとこれから自分ができることも考えて、皆さんの活躍も楽しみにしていようと思いました。

司　　会：　そして、御調の延安さん、いろいろな話を聞いてどうだったですか。

延　　安：　レベルが高いなと、まず一番初めに思いました。どの高校も自分の地域と世界、今回の G7 をリンクさせて考えていたので、僕はまだそのレベルには達してないので、まずすごいなというのが今日受けたことで。今回ここに参加させていただいて、皆さんのこういう考えを僕が聞けたのはとても重要だなと思って、次に僕がこういう授業や学びを受けるときは、皆さんの意見を参考にしてやっていこうかなと思いました。本当にありがとうございます。

司　　会：　そしてもう１人だけ。青木さん、この後進路とか受験も真っただ中なんですけれど、

忙しい中で今日参加して、どうでした？

青　　木：　やはりこのような機会に参加できることが、すごく貴重ですし、私たちがここに集まってこういう縁があって話を聞けたというのがすごくいいなと思いました。やっぱりみんな平和についてだけではなくて、地域づくりとかそういうことに対して、様々なアプローチを持っているので、自分１人で考えるというのはすごく難しいことなので、このような機会を得て、みんなの意見を聞きながら、これからの世界とかまちづくりを進めていけるのが理想なんだなと思いました。今日はありがとうございました。

司　　会：　ありがとうございました。

　改めまして、お時間迫ってまいりましたが、湯﨑知事、中身はいっぱい触れていただいたので、この熱量や若者の姿をどう感じられましたか。

湯 崎 知 事：　本当に頼もしく感じますよね。今日は平和の話で、若者が伝承するという話があったと思うんですけれど、伝承すると同時に未来をつくっていくのが、またみんななので、伝承というのは過去のことですけど、それを踏まえて未来をつくっていく。それを本当にみんなのような若者が担っていってくれると思うと、とてもうれしいし、未来は明るいなという感じがしました。

司　　会：　そして、知事、最後に、この後受験があったり、2 年生、3 年生への進級があったり、御調は連覇を目指したり、いっぱいあるんですけれども、広島のあまねく若者が来たことへのメッセージをお願いできますか。

湯 崎 知 事：　広島では、いっぱいいろいろなチャンスがあると思うので、ぜひそれを逃さず頑張ってつかみ取って、世界に羽ばたいてほしいなと思います。ちなみに世界の中心はここだからというか、みんなが世界の中心だからね。世界って球でしょう。だから、どこが中心でもいいんですよ。みんながそれぞれ中心だから、みんなが世界の中心だと思って、頑張ってほしいと思います。

司　　会：　まさに今日の円卓にふさわしいお話でした。みんなが中心ということで頑張っていただきたいと思います。湯﨑知事、どうもありがとうございました。

閉会

司　　会：　では最後は手を振ってお別れです。以上で、「＃湯﨑知事と語ってみた」supported by 田宮パーツ終了です。

　ありがとうございました。